

# サロンの文芸活動

—皇后定子サロンと若き文雅の帝王達—

付・「清涼殿の丑寅の隅」の章段の解釈存疑

目加田 さくを

皇后定子サロンは、定子その人の資質、人柄が稀に見る人材であった為に、令名通り、実力第一の文芸活動をしたサロンであるが、それを支えるいくつかの環境的条件を度外視してはいけまい。今回は、その活躍の「場」を整地した、又、保護した帝王側にスポットをあててみよう。

結論を先きにいえば、若き文雅の人、円融帝・一条帝父子の宮廷があったということである。更には円融の父村上帝の宮廷における華麗な文芸活動、ことに、後宮に対するそれ、である。更には後宮サロンを開花させた亭子院に迄、遡るが、又、歴代宮廷の文雅の行事、又、花山院のような歌人帝王の活動等々に迄、当然括がるが、一応、ここでは、定子にかかわる宮廷に限っておこう。

日本紀畧によると、(新野國史大系本ニヨル、以下同)

969 安和二年八月十三日戊子。天皇讓位於皇太子。(再融)新主於襲芳舍受禪。旧主年廿一。在位二年。新主年十一。

984 永観二年八月廿七日甲辰。天皇讓位於皇太子。(花山)

サロンの文芸活動 — 皇后定子サロンと若き文雅の帝王達 — 付・「清涼殿の丑寅の隅」の章段の解釈存疑

986 寛和二年六月廿三日庚申。今晚丑刻許。天皇密々出禁中。向東山

花山寺落飾……奉劍鑿於新皇年七

七月廿二日戊子。天皇即位於大極殿

というから、三皇の治世は左のようである。

円融	安和二年 869 八月十三日	即位	11才	15年	退位	26才	7年(大鏡)	33才	死
花山	永観二年 984 八月廿七日	即位	17才	二年	退位	19才	二十二年	41才	×
一条	寛和二年 986 六月廿三日	即位	7才	二五年	退位	32才	×	1000	長保二年 25才
			21才	8年	1011 六月十三日				

いづれも少年、青年の王であった。円融帝は11才で即位し、26才の若年で退位した帝であるが、在位中から退位後まで、文雅の生活を送った。詩文、和歌に殊に堪能であった父村上帝には及ばないが、帝は帝なりに文芸の世界に浸る日常のようである。

在位中から退位後、崩御迄の文芸活動を紀畧でみると、

円融971 天祿二年正月廿一日戊午内宴詩題云 鶯啼宮柳深 13才

於淑景舍有此宴

972 (三年正月三日甲午天皇於紫宸殿加元服御年十四) 14才

974 天延二年三月十八日丁卯於清凉殿花宴 題云 花前樂 16才

文時朝臣所獻

977 貞元二年三月廿六日丁亥天皇幸太政大臣閑院第。 19才

召文人賦詩。召伶人奏樂。

花山 985 寛和元年二月十三日戊子。朱雀院太上天皇出自堀河 27才

院 幸于紫野 騎御馬 為子日興也

風從公卿以下。布袴狩衣各以任意。奏絲竹。

獻和歌一

八月廿九日辛丑後太上天皇依病落髮

一条 986 寛和二年十月十日乙巳。円融法皇遊幸大井河、賦 28才

詩詠歌。題云。翻水辺紅葉。撰政以下多

以風從。

990 正暦元年正月五日壬午天皇元服年十一。 32才

991 二年二月十二日癸丑……法皇崩年卅三。 33才

この中、紫野遊行と大井河御幸は著名である。

西本願寺本能宣集冒頭に

それ卅一字の詠……円融太上天皇の在位のすゑに勅ありて家集を

めす。今上花山聖代また勅ありておなじき集をめす……

とあるによれば、円融帝は父村上帝の所謂梨壺の五人の一人能宣に

家集を召したという。又、後撰集の代表的歌人の一人中務にも集を

召した。父村上帝に劣らず、和歌への関心が深い。中務の場合には御

集にこの事が記される。

円融院御集冒頭に (桂宮本叢書ニヨル)

中務に哥えりてまいらすへきよし仰られたりける、かきてまいら  
せけるおくに書たりける

1 いまさらにおいのたもとに春日野のひとわらへなるわかかなをそつ  
む

これを、おくまでも御覽せてをかせ給てけるに、又のとし御覽  
しつて、いとあはれなりける事をと、おとろかせ給て、むま

このみつあきらの少将を御使にて、つかはしける

2 かすかのおほくのとしはつみつれと老せぬものはわかなよりけ  
り

御返し

3 としのつむわかればおなしかほなれとけふにはにすやならむとす  
らん

とあるように、和漢の才に秀で、後撰集を撰せしめた父帝村上に似  
て、円融帝も詩文、和歌への関心が深く、令名高い中務に「歌えり  
てまいらすへきよし」下命したものとみえる。中務の歌を一気に読  
了しなかつた帝は——(帝ならずとも中務集を一気によむ人はあま  
りあるまい)——、奥に書きつけた中務の歌に気付かぬまま、年が  
あけてから発見、「いとあはれなりける事」と驚いて、わざ／＼

中務の孫光昭の少将を使にして返歌を贈ったという。円融帝は  
文芸を愛する、歌、ひいては歌人をいとおしむ、こまやかな情の持  
主である。それは御集の隨所にあきらかである。

○円融院御集 (書陵部蔵) 六四首

4 5を村上御製とする後撰集に従い除けば六二首。(欠落歌三首？  
を補えば六五首となるか。)

(後撰)今上むめつほにおはしましし時たき木こらせてたてまつり給ひける

(二二〇)山人のこれるたきぎは君がためおほくの年をつまんと 御集 4

ぞ思ふ

御返し

(三六)年のかずつまんとすなるおもにはいとどこづけをこ 御集 5

りもそへなん

現存本によつてみると六二首は、

1 ② 3 中務に歌所望 ○御御製

(4 5) 大皇宮より東宮に 後撰集により 一三八〇 村上帝関係 省く。

⑥ 7 朝光大将へ 贈答 (閑院の花)

8 ⑨ 10 ⑪ 実方と贈答 (実方馬命姉と物言ふ折、山吹の花を投げさせ給……)

せ給……)

⑬ 13 三条大将と贈答 (あはせたき物献上)

14 ⑮ ないしのかみと贈答 (一本麴献上)

16 17 宰相の君と贈答 (菊)

18 ⑱ 重之(相如)藏人退任に際しねぎらい

⑳ 堀河中宮へ

21 ㉒ 堀河中宮弔問歌、崩後三条后宮と贈答

㉓ 24 三条宮出家、贈答

㉔ 26 皇姉一品宮資子と贈答 月明き夜

㉕ 27 一品宮へ

㉖ 29 一品宮と贈答 弓のけちの頃

30 31 ㉗ 實資、一品宮、上(實資大将と公任中将と暮をうち、負態

に實資、銀の籠に松虫を入れて弘徽殿に奉る)

新勅撰 474

円融院の御時、中将公任と暮つかまつりてまけわぎに銀の籠に虫入れて弘徽殿に奉らせ侍りける 小野宮右大臣

とあり、御集には一品宮とあるから、

当時資子は弘徽殿に住んでいたと思わ

れる。

實資が負態の銀籠(松虫を入れ)を一品宮に奉つた事、それへ一品宮の返歌、更に、上の返歌という三首じたてである事は、円融帝が如何に4才上の皇姉と親しかったか、を物語る。

⑳ 34 一品宮に贈答 内裏火災後大雪

35 ⑳ 東三条右大臣任官して、贈答

37 38 ⑳ 兼家(元輔)の餅献上、銀ののこに歌。贈答 東三条大臣

41 ④ 兼家一品宮に銀の髭籠に入れて(若菜献上) 贈答

帝返歌

又、帝の返歌である。

44 ④ 女七宮、たかな献上贈答

④ 48 后になりをくれ給てなげく梅壺女御に慰め 尊子

48 全 女御父兼家東三条大臣 帝の愛をよるこぶ

ゆげいの命婦に

④ 帝の返歌

⑤ 51 すけまさの宰相に、(むすめの結婚話をきき心配) 退位後 贈答

52 ⑤ 54 ⑤ 子日、還御後、一条左大臣贈答 雅清

サロンの文芸活動 | 皇后定子サロンと若き文雅の帝王達 | 付・「清涼殿の丑寅の隅」の章段の解釈存疑

56 音階  
57 選子より上皇のたちよらぬを恨む、贈答

58 一品宮に「こものものをかしき」を贈る贈答

60 〇欠  
大齋院選子より 返歌欠

61 四条大后宮に臨終の歌

62 堀川中宮の死をいたむ

63 宇佐使へ 餞別歌

64 賀々乳母へ餞別歌

廷臣関係

朝光二首 實方四首 三条大将二首 重之(相如)二首 東三条右大臣兼

家十首——實資三首 すけまさ二首 一条左大臣雅信四首 宇佐使一首

女房乳母関係

尚侍灌子二首 宰相君二首 加賀乳母一首

後宮関係

堀河中宮四首(二首)\* 三条宮四首(二首)\* 梅壺註子一首

四条后一首

皇姉妹関係

皇姉一品宮資子十五首 皇妹女七宮三首 大齋院選子三首

女流歌人関係(中務)

廷臣との親しい贈答——梅花を賞で、山吹を投げ入れてのひやか

し、香につけ、菊につけ、——は文雅の君らしい。後宮の父親心を  
付度する、或は后になりおくれた後宮を慰める、或は退官の廷臣の  
気持をうかがおうとする、遠地へ向う乳母にはなむけ等々、こまや  
かな心情表現と共に、ユニークなのは、帝の家集中に、廷臣関係の  
歌を三十首と最多数もつ事、である。

次に皇姉一品宮資子関係歌が十五首を占めることもユニークであ

る。多くの帝に最も多くみられる後宮との恋の贈答——(それは多

くの歌人に共通の、いわばありふれた生であろうが)——よりも、

姉資子との風雅な贈答の生活を表白する歌が多いことにも注目しよ

うと思う。父村上帝のような派手な好色癖、華やかな和漢の才、活

動はなかったが、円融帝は、しめやかに、ひっそりと、しっかりと文

雅の生を生きたようである。勅撰集入集歌も廿四首を数える。(詩

文は残らないようである。文料以下諸集の詩文中にその名は出る

が、作者ではない)

さて、紀畧で一条帝即位後、円融上皇崩までをみてみよう。

990 〇正暦元年正月五日壬午。天皇元服……廿五日壬寅内大臣藤原

朝臣女定子入掖庭為女御

二月十一日以藤原定子為女御

七月二日……入道太政大臣藤原朝臣兼家範年六十二

十月五日……女御從四位下定子冊為中宮

991 〇正暦二年二月二十二日……法皇崩年卅三 逃位後八年。

因みに皇后定子サロンの終りは  
長保二年十二月十五日……今日皇后定子於前但馬守平生昌朝臣宅。  
有御産事。皇女嬬子。

十六日己未。皇后崩給 年廿五  
在位十一年

七才で即位した一条帝は正暦元年正月五日、漸く十一才で元服。  
同月廿五日に内大臣藤原道隆女定子十五才が入内する。時に父の円  
融上皇三十二才。定子の父道隆三十八才である。定子入内に際し  
て、円融上皇は一条帝に、定子にかかわる情報の一つとして、その

父道隆について色々と言語聞かせたものと思われる。そのユニークな話が、三位中将時代の逸話「たのむはやわが」の一件であろう。

円融在位中は、實頼、伊尹、源兼明、兼通、頼忠の時代で、永観二年には関白太政大臣頼忠の下に兼家は右大臣であった。道隆は非参議従三位である。寛和二年六月二日花山帝が逃位、兼家は外孫一条帝即位により摂政となり、道隆も七月五日権中納言、ついで七月廿日権大納言となる。

永観二年の公卿補任の註記をみると、道隆が右中将に任ぜられたのは貞元三年十月十七日であり、まだ従四位下。従三位となつたのは永観二年正月である。したがって「三位中将」となつたのは永観二年正月七日以降ということになる。

公卿補任 永観二年

非参議従三位藤道隆 三十二

天曆七年癸丑生 正月七叙右

中将如元 八月廿七日 春宮権大夫

右大臣(兼家公)一男。母従四位上摂津守藤中正女(贈正一位時姫)

康保四十一年一従五下(中宮御給。御即位。十五十一月昇殿。同五正

十三侍従。十二月十八左兵衛佐。天禄二十五年右衛門佐。同四正

七従五上(廿一)天延二正八藏人。二月七日兼伊與権介。十月十一

左少将。同三正七正五下(一品内親王給廿三)同四正廿八備後権介。

貞元二正七従四少将。廿五。同月備中権守(止少将昇殿)同三

十七右中將。天元二正廿九兼備中権守。同四正七従四上(廿九)

同五、正七、正四下(冷泉院御給)

永観三年 非参議従三位道隆右中将春宮権大夫

寛和二年 権大納言正三位道隆  
七月五日(元三位中将)右中将如元  
同廿二日(従三位)同廿七日正二位

サロンの文芸活動 — 皇后定子サロンと若き文雅の帝王蓬 — 付・「清涼殿の丑寅の隅」の章段の解釈存疑

枕草子「清涼殿の丑寅の隅」の章段の構成

清涼殿の丑寅の隅の、北の隔てなる御障子は、荒海の  
繪、生きたるものどもの、おそろしげなる、手長足長など  
をぞかきたる。上の御局の戸をおしあげたれば、つねに目  
に見ゆるを、にくみなどして笑ふ。勾欄のもとに青き瓶  
の、大きなるをすゑて、桜のいみじうおもしろき枝の五尺  
ばかりなるを、いと多くさしたれば、勾欄の外まで咲きこ  
ぼれたる、屋つかた大納言殿、桜の直衣の少しなよらかな  
るに、こき紫の固紋の指貫、白き御衣ども、上にはこき綾  
のいとあざやかなるを出だしてまゐりたまへるに、上のこ  
なたにおはしませば、戸口の前なる細き板敷にゐるたまひ  
て、ものなど申したまふ。

序

御簾の内に、女房、桜の唐衣どもくつろかにぬぎたれ  
て、藤、山吹など色々このまじうて、あまた小半部の御簾  
よりもおし出でたるほど、屋の御座のかたには、おももの  
ある足音高し。警蹕など「おし」といふ声聞ゆるも、うら  
うらとのどかなる日のけしきなど、いみじうをかきしめ、  
はての御盤取りたる藏人まゐりて、おももの奏すれば、中の  
戸よりわたらせたまふ。御供に廂より大納言殿、御送りに  
まゐりたまひて、ありつる花のもとに歸りたまへり。  
宮の御前の、御几帳おしやりて、長押のもとに出でさせ  
たまへるなど、なにとなくただめでたきを、さぶらふ人  
も、思ふことなき心地するに、「月も日もかはりゆけども

(一) 本題

久にふる三室の山の」といふことを、いとゆるるかに、うち出だしたまへる、いとをかしう覚ゆるにぞ、げにぞ千歳もあらまほしき、御ありさまなるや。

陪膳はいぜんつかうまつる人の、をのこともなど召すほどもなく、わたらせたまひぬ。「御硯の墨すれ」と仰せらるるに、

目はそらにて、ただおはしますをのみ見たてまつれば、ほどどつぎめもはなちつべし。白き色紙おしたたみて、

①「これにただいまおほえむふるきこと一つつつ書け」と仰せらる。外にゐるたまへるに、「これはいかが」と申せば、

④「とう書きてまゐらせたまへ。男は言加へさぶらふべきにもあらず」とて、さし入れたまへり。御硯取りおろして、

「とくとく。ただ思ひまはさで、難波津も、なにも、ふと覚えんことを」と責めさせたまふに、などきは臆せしにか、すべて面さへ赤みてぞ思ひ乱るや。春の歌、花の心など、さいふいふも、上臈じやう二つ三つばかり書きて、「これに」とあるに、

⑤年ふればとしはひ齡は老いぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし

といふことを、「君をし見れば」と書きなしたる、御覽じくらべて「ただこの心どものゆかしかりつるぞ」と仰せらるるついでに、「円融院の御時に、」  
⑥「草子に歌一つ書け」

(一)

C

と殿上人に仰せられければ、いみじう書きにくう、すまひ申す人々ありけるに、「さらに、ただ、手のあしきよき、歌のをりにあはざらんも知らじ」と仰せらるれば、わびてみな書きける中に、ただいまの関白殿、三位の中將ときこえける時、  
①「しほみ 潮の満ついつもの浦のいつも君をば深く思ふはやわが」といふ歌の末を「頼むはやわが」と書きたまへりけるをな、いみじうめでさせたまひける」など仰せらるるにも、  
②「すずるに汗あゆる心地ぞする。年若からん人、はた、さもえ書くまじき事のさまにやなどぞ覚ゆる。例いとよく書く人も、あぢきなうみなつつまれて、書き汚しなどしたるあり。」  
⑦古今の草子を御前へ置かせたまひて、歌どもの本を仰せられて、「これが末いかに」と問はせたまふに、  
①「すべて夜屋心にかかりて覚ゆるもあるが、け清う申し出でられぬはいかなるぞ。宰相の君ぞ十ばかり、それも覚ゆるかは。まいて、五つ六つなどはただ覚えぬよしをぞ啓すべけれど、  
「さやはけにくく、仰せごとを、はえなうもてなすべき」とわび、くちをしがるもをかし。知ると申す人なきをば、  
②「やがてみな読みつづけて、來算せさせたまふを、」  
③「これは知りたることぞかし。などかうつたなうはあるぞ」と言ひ

C

歎く。中にも、古今あまた書き写しなどする人は、みなも  
寛えぬべきことぞかし。

①「村上の御時に、宣耀殿の女御ときこえけるは、小一

条の左の大臣殿の御女におはしけると、誰かは知り奉らざらん、まだ姫君ときこえける時、父大臣の教へきこえたまひけることは、<sup>＊いち</sup>「一には御手を習ひたまへ。つぎには琴の御ことを、人よりことに弾きまさらんとおぼせ。さては、

古今の歌二十巻を、みなうかべさせたまふを、御学問にはせさせたまへ」となんきこえたまひけるときこしめしおきて、御物忌なりける日、古今をもてわたらせたまひて、御几帳を引き隔てさせたまひければ、女御、例ならずあやしとおほしけるに、草子をひろげさせたまひて、<sup>①</sup>「その月、

D

なにのをり、その人のよみたる歌はいかに」と問ひきこえさせたまふを、かうなりけりと心得たまふもをかききもの、ひがおぼえをもし、忘れたる所もあらば、いみじかるべきことと、わりなうおぼしみだれぬべし。そのかたにおほめかしからぬ人、<sup>①</sup>「二三人はかり召し出でて、碁石して

数おかせ給ふとて、強ひきこえさせたまひけんほどなど、いかにめでたうをかしかりけん、御前にさぶらひけん人さへこそうらやましけれ。せめて申させたまへば、さかしう、やがて末まではあらねども、すべてつゆたがふことなかりけり。いかでなほ、すこしひがごと見つけてをやま

D

と、ねたきまでにおぼしめしけるに、十巻にもなりぬ。<sup>とまき</sup>  
『さらにも用なりけり』とて、御草子に夾算さして、大殿ごもりぬるも、まためでたしかし。いと久しうありて、起きさせたまへるに、『なほこのこと、勝ち負けなくてやませたまはん、いとわろし』とて、下の十巻を『明日にならば、異をぞ見たまひあはする』とて、『今日定めてん』と、<sup>①</sup>大殿油まゐりて、夜更くるまで読ませたまひける。されど、つひに負けきこえさせたまはずなりにけり。上わたらせたまひて、『かかること』など、殿に申しに奉られたりければ、いみじうおぼしさわぎて、御誦経などあまたせさせたまひて、そなたにむきてなん念じ暮したまひける、すきずきしうあはれることなり』など語り出でさせたまふを、上もきこしめし、めでさせたまふ。<sup>①</sup>「われは、三巻、四巻をだにえ見はてじ」と仰せらる。『昔は、えせ者などもみなをかしうこそありけれ。この頃はかやうなることは聞ゆる』など、御前にさぶらふ人々、上の女房、こなたゆるされたるなどまゐりて、口々いひ出でなどしたるほどは、まことにつゆ思ふことなくめでたくぞ覚ゆる。

(岸上氏 増訂三巻本枕草子)

○序

(1) 場所・時・登場人物の設定

a 清涼殿の弘徽殿の上の御局

サロンの文芸活動 | 皇后定子サロンと若き文雅の帝王達 | 付・「清涼殿の丑寅の隅」の章段の解釈存疑

b 春日うらかな日・桜満開

c 上・中宮・伊周大納言・女房達

(2) 予備行動

○上を中心に雑談

○上・屋の御座の方へ食事に出かける

大納言がお送りして帰り、もとの桜花を活けた青磁の花瓶の下に坐る

○中宮が長押のもとまでにじり出て兄大納言と対話

○大納言、万葉の古歌 誦詠

○本題(一)

A部

○帝 食事を了えて上局に戻る

②帝、「御硯の墨すれ」と下命(ここ以下の主格は、ついでには後述)

④帝、「これにたゞいまおぼえむふるきこと一つづつかけ」と下命

命

③清少納言、大納言に「これはいかが」と申せば

①大納言、「とうかきてまゐらせ給へ男は……」

⑤清少納言、「年ふれば……」の歌の「花をしみれば」を「君をしみれば」とかき改めて進上する。

①⑥一條帝、「ただこの心どものゆかしかりつるぞ」と仰せらるる

①⑥一條帝、「ただこの心どものゆかしかりつるぞ」と仰せらるる

B部

⑧

ついでに一條帝が披露する父帝円融帝と中宮の父三位中将道隆の故事

隆の故事

⑤ 円融帝が廷臣に「草子に歌一つ書け」と下命

① 三位中将道隆「たのむはやわが」とかき改めて進上。

① 円融帝「いみじうめでさせ給ひける」

④ 清少納言の感想(自慢)——AB全体の結び

これは、実は次の図式を構成する。

A 子 一条帝 下命 (中宮付 女房) 清少納言答 帝嘉賞

B 父 円融帝 下命 廷臣 道隆 答 帝嘉賞

実は、帝は桜花爛漫の春日、食事中に、ふと父帝から聞いた道隆の機智を思い出し、早速、中宮付の女房達を一つ試してみよう、と思いつたのではなかったか。食後、④いそいで上御局にもどり、「墨をすれ」と命じたのは。

付 解釈存疑 本段の解釈で(a)の條を「中宮」を主格とする解釈

があるので、その不当なことをのべる。

(a)(b)(g)の主格は一條帝である。中宮とるのは誤りであろう。

以下、理由を述べる。

(a)は、一條帝が主格であらねばならぬ。

1 その直前、「わたらせ給ひぬ」の主格は一條帝である。ついで、

(a)「御硯の墨すれ」と仰せらるるに……であるから、当然、主格は一條帝。もし、中宮が「御硯の墨すれ」と言うのであれば

「宮の御前の」と入るべきである。枕草子は、極めて簡潔な名文

であるが、主格のとちがえをきたすような省畧はしないのであ

る。後方の、C部に、「古今の草子を御前に……」と主格を明示



しないで語り出すが、この場合は、「……啓すべけれど」が下に  
来るので、下命者が中宮であることを明示するわけで、「宮の御  
前の」が不必要なわけである。

2 ③④の問答は、天皇の下命であるから、清少納言が遠慮して、延  
臣の大納言に、一応おうかがいをたてた迄。もし、中宮の下命で  
あったら、女房達は直ちに答をする迄で、大納言に相談なぞする  
筋合ではない。

3 ①「ただこの心どものゆかしかりつるぞ」という一条帝の気持  
は、次に彼が語り出す父円融帝の御代に、道隆が鮮やかに答え  
た、「たのむはやわが」を思い浮べていたからで、父帝の御代に  
あった「文芸的にすぐれた行動」が、全く同じスタイルで、自分  
の治政下にも行われるかしら、行われる事への期待があつて、そ  
れが見事に叶えられたことへの感激、よろこびに外ならない。し  
かも、その、父帝の廷臣道隆の愛娘である中宮定子お気に入り  
の清少納言が、自分のテストに見事に合格した、という二重の嬉し  
さである。

4 前掲のように、七才で即位した一条帝は十一才で正暦元年990正月  
五日元服、同廿五日内大臣藤道隆女定子(十五才)が掖庭に入  
り、二月女御となり、十月中宮となった。

「ただ今の関白殿三位の中将ときこえける時」というこの文芸的  
行動があつたのは、彼が従三位となつた永観二年984正月七日以降  
で、円融院退位の前日、全年八月廿六日迄の間であらう。

つまり、円融帝は退任の年の事で、一層印象に深くのこつてお  
り、それから六年後、非参議三位中将だつた道隆は正二位内大臣

となつている。何れ関白となるであろうと取沙汰されている。

(事実五月に関白となる。)その女定子が、我が子新帝(二条)に内入と  
決定する頃、婿となる新帝に、「たのむはやわが」の一件を語つ  
てきかせたものと思われる。「内大臣はかくくの人物、その女  
も恐らく父母に似て才色兼備の姫であらう云々」と。「清涼殿丑  
寅の隅の……」の章段は岸上説に従い正暦五年994とすれば、それか  
ら又四年後である。十五才の帝が十九才の中宮と、睦しく語らう  
弘徽殿の上御局には、才媛の女房清少納言らが目を輝やかして控  
え、中宮の兄伊周大納言も、おっとりとした籙の外に侍している。帝  
が思い出す筈である。

5 年少の帝が、関白に、「ただいまの関白殿三位中将ときこえける  
時」と敬語を用いるのは自然であるが、中宮が、帝の御前で、自  
分の父を、「ただいまの関白殿三位中将ときこえける時」は不敬  
であらう。もし、中宮の言であれば、「ただいまの関白、三位中  
将と申し侍りし時」とあるべきところである。

6 ……仰せらるるついでに」であるから、(f)と(g)は同一主語、一条  
帝である。

7 定子も道隆から、入内前に、この話、定子が入内する一条帝の父  
帝円融帝の御前で、「たのむはやわが」とかきかえて名譽をえた  
一件は、当然きいていたであらう。しかし、円融帝の子である今  
上の御前で、「円融院の御時に草子に歌一つかけと殿上人に仰せ  
られければ……、いみじうめでさせたまひける」と、シャア〜  
と見てきた事のように父の自慢話をするであらうか。甚だ不自然  
であらう。

8 しかも、今上が、食事を了えて、⊗上御局にもどられるが否や、待ちうけていたかのように「御硯の墨すれ」と女房に命じて、歌をかかせるような事をするであろうか。

以上、到底、(a)(b)(g)の主格を中宮とすることは不可能と思う理由である。

○本題(一)

本題(一)の騒ぎが一しきり、おちついたところで、今度は、中宮が行動開始

C部

⑦中宮が自分の女房達に、古今集の暗記テストをはじめめる。

①女房達全滅

⑦中宮不満

D部

⑥「ついでには」、と中宮は(話しはじめる。帝が円融帝。)、村上帝(円融帝の御代。)の御代。小一条左大臣女宣耀殿女御の入内前の家庭

教育紹介

⑩村上帝のテスト、宣耀殿女御に、テキストをみせずに、古今集をそらんじさせる。

①女御完璧に答える

④村上帝、敗北はくやしいが満足

⑧中宮について一条帝の称讃、⑨二、女房らの礼讃。それは、中宮の父道隆、中宮女房清少納言の名答という快事が基調にあつての幸福感であり、華麗な中宮定子サロン全盛の姿である。同時に、序、本題(一)、本題(二)を通じて、つまり、本章段全体の

結びとなっている。

本題二を明示してみよう。

C 中宮一条帝 古今集テスト 女房 × 中宮不満

D 村上帝一条帝 古今集テスト 女御 ○ 村上(満足)わたし、表は

全体の構成は

序

本題一帝 主導

A 現在下命者 一条帝 古歌一首問題 中宮付女房対象 ○一句

B 故事円融帝一条帝 古歌一首 延臣問題 ○一句

本題二 中宮 主導

C 現在 一条中宮 古今集 女房全員 ×

D 故事村上帝円融帝 古今集 女御芳子 ○

R 結び村上帝御代礼讃 表示すると一目瞭然

1 本題一と本題二は好一対をなす。

2 AB・CDがそれ／＼対をなす。

3 AC・BDがそれ／＼対をなす。

三種の対を構成している。拙著「枕草子論」で詳述したように、枕草子は非常にすぐれた構成能力を発揮した散文詩である。極限まで抄畧し、簡潔な表現であり、ガッシリとした枠組みをもつ。したがって、印象が強烈、鮮明である。読者の感覚、知覚を疲れさせないで作者の意図を容易に理解させるからである。駄文、まとまりの

ない文ほど、受容者を疲労させるものはない。したがって印象がうすくなり、駄作と思わしめるのである。枕草子は、この呼吸を心憎いまで知悉して製作された作品である。

さて、注目すべきは、円融帝の文芸好きである。この道隆の「かきかえ」をいたく称讚する態度、更には、何気なく、「草子に歌一つかけ」と殿上人に仰せられた、という事。「かけませぬ〜」と「すまひ申す人々」に、「さらに、ただ、手のあしきよき歌のをりにあはざらんも知らじ」と無理じひをした、その態度である。それが、道隆の「たのむはやわが」を生んだのであった。後年、サロンの名主人公定子中宮も亦、同様の態度をとったのである。時鳥をき〜に行つた清少納言らに、「さていつら、歌は」とたづね、詠めなかつたと言上する清少納言らに、「口をしのことや。上人などの聞かんに、いかでか、つゆをかしきことなくてはあらん。その聞きつらん所にて、きとこそはよましか。あまり儀式さだめつらんこそあやしけれ。ここにもよめ。いとふかひなし」と責める。どうしても詠めませんというと、「いまもなかその行きたりしかぎりの人どもにていはざらん。されどさせじと思ふにこそ」と「ものしげなる御けしき」とある。優しい中宮には珍らしく厳しく執拗な追及である。つまり、これは、中宮の女房指導なのである。古今集のテストもしかり。又、村上帝、芳子の話をしてきかせるのも、中宮の女房教育なのである。この中には、小一條左大臣の姫君教育のモットー「一には御手を……二には琴の御琴を……さては古今の歌二十巻をみなうかばさせ給まふを御学問にはせさせ給へ」が入っている。定子はおのがサロンの女房らに、この芳子の故事、当然、イン

テリとしてしつておくべき事を、おしえると同時に、一には書——（あさか山、なには津の歌を最初の手習にするから、習字の練習は即、歌の学習にもなる）——、二には琴、三には古今集暗記をしなればいけないのだわ、と自覚させようと話したのである。すでに拙著「東西女流文芸サロン」中宮定子サロンと定子の指導力で詳述したが、定子の適切な指導育成の結果、才媛が育つたし、そういう主人のサロンであったから「枕草子」が出現したのである。円融帝は前述、中務に歌をもとめたり、姉の一品資子内親王と乱暮とりに興じたが、その勝態扇歌合を六月十六日に、負態扇歌合を七月七日に催した。梅壺にすんだ資子とは日夜親しく歌の贈答をしている。二十六才退位、三十三才の若さで崩じた上皇である。

一条帝も七才即位、十一才で才媛の定子が入内してからは、殊に仲むつまじく、定子の白氏文集陶料のよき相棒であった。一条帝の文芸愛好、礼讚の態度は、<sup>⑧</sup>でよく表わされているが、枕草子の随所にみうけられるところ。たとえは

○蘭省花時錦帳下 草の庵を誰かたつねん の件であるが、中宮が清少納言をお召しになり、「上わたらせたまひで、かたりきこえさせたまひて、をのこともみな扇にかきつけてなん持たる」など仰せらるゝにこそ……一条帝が中宮のところへ御こしになり、その一件を話してきかせられた、殿上人ら……とその派手な称讚ぶりをも伝えたところからすれば帝自身も甚だ感動していた様子である。

○おいこの君にこそ

の場合も、<sup>⑨</sup>裁えてこの君と称すと誦じてまた集まり来たれば……「さることには、なにのいらへをかせむ。なかなかならん。殿上にて



という歌を同じやうにかゝせ給て御方方に奉らせ給けるにこの御返事方々さまさまに申させ給けるに広幡の御息所は薫物をぞ参らせたりける。「さればこそなほ心ことに見ゆれ」とおぼしめしけり。いとさこそなくとも、いつれの御方とかやいみじくしたてて参り給へりけるはしもなこそその関もあらまほしくぞおぼされける……

その二 は宣耀殿女御芳子に対する古今集暗誦テスト

このような、村上帝の後宮テストのあそびは、子の円融帝の「草子に歌一つづつ書け」となり、更に、その孫一条帝の「これにただいまおぼえむふるきこと一つづつ書け」へと継承されたのである。

それはさておき、村上帝のこの後宮後援の成果が、遂に、前古木曾有の天徳四年内裏女房歌合の盛儀開催となったのである。この村上帝も四十二才の若さで崩じた。村上、冷泉、円融、花山、一条という若き文雅の帝王達が育んだ宮廷における文芸愛好の雰囲気、白氏文集の世界に陶酔する中宮定子に、見事なサロンを開花させる場を提供したのである。

正誤表 日本文学研究第二十五号

「サロンの文芸活動——皇后定子とその系流——」

〔41頁下段おわりより6行分〕

用例

。「雲の波煙の波」の出典

白氏文集卷三 海漫漫

海漫漫 直下無底 傍無辺 雲濤煙浪最深處 人伝中有三神山……  
白詩に通曉していた定子は、この「雲濤煙浪」を訓読し和歌の世界に用いる。神韻縹渺たる海漫漫の世界とダブらせて、悲愁幽艶の美を形成しあげたのである。